

研究論文

# オリンピックの哲学的人間学：より速く、より高く、より強く、より人間的に<sup>1</sup>

関根正美（スポーツ哲学研究室）<sup>2</sup>

## Abstract

The famous Olympic motto “Citius – Altius – Fortius” has been influenced in the Olympic Games as an Olympics idea in addition to Olympism. Hans Lenk proposed that it should be added “humanus (more human)” to the Olympic motto. This thought of “more human” intends to keep a value of human being in the Olympic phenomenon. But Lenk doesn’t make it clear conceptually although he describes the meaning of “more human” in various context. Our task for the Olympics is that how the thought should add to this human element for the pathology of the modern Olympics and how can it be a route of reform to the modern Olympics. This study aims to clear of the meaning “more human”. This problem belongs to the philosophical anthropology of the Olympics. The methods are as follows. At first, we interpret the discussion about “the human limit of sport” in 1985 from the document interpretation of 1977 as the starting point. Then, we consider targeting at the discussions about competitive sport and the Olympics from the viewpoint of “the biological basis” of 1987. The conclusions are as follows: Human being is always restricted existence, and not omnipotent and eternity existence. The “more human” is the word that emphasized that a human being should be achieve something in the restricted situation. We can point out the direction of the continuation of the Olympics that we should expect athletes to achieve ethically under a biological limit.

## 抄録

オリンピックの有名なモットー「より速く、より高く、より強く」は、オリンピズムに加えてオリンピックの理念としてオリンピック大会に影響を与えてきた。ハンス・レンクはそのオリンピックモットーに「より人間的に」を加えるべきであると提案した。この「より人間的に」は、オリンピック現象における人間存在の価値を保つことが意図されている。しかし彼は、「より人間的に」の意味を様々な文脈で記述しているにも関わらず、概念的に明らかにしていない。本研究の目的は、H.レンクによって提起された新たなオリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く、より人間的に、より美しく」の「より人間的に」の概念を明らかにすることと、それを一つの原理

<sup>1</sup> The philosophical anthropology of the Olympics : faster, higher, stronger, more human

<sup>2</sup> Sekine Masami

にして現代オリンピック存続のための思想を提示することである。本研究はオリンピックの哲学的人間学である。方法は次のとおりである。まず、1977年の文献解釈を出発点として、1985年における「スポーツの人間の限界」に関する議論を解釈する。次に、それを受けた1987年の「生物学的基盤」の視点からの競技スポーツとオリンピックに関する議論を対象として考察を進める。結論は以下のとおりである。レンクが提唱した「より人間的に」の意味は次のようになる。人間は常に限界づけられてあり万能、永遠の存在ではないこと。「より人間的に」とは、その限界づけられている状況の中で成し遂げることを強調した言葉である。オリンピックの持続の方向を示すならば、競技者の達成行為を生物学的限界のもとで倫理的に追求する方向を指摘できる。

Key Word: Hans Lenk, Olympic motto, biological basis, achievement

キーワード：ハンス・レンク，オリンピックモットー，生物学的基礎，達成

## 1. はじめに

オリンピックの基礎であるオリンピズムは、現在まで世界中で尊重され認められてきた。オリンピックムーブメントの価値もまた、今日のグローバル化された世界の中で指摘されている。近代オリンピックはクーベルタンが再興して以来、平和や教育という人間的価値を提唱して発展してきた。その一方で、1936年のベルリン大会や1980年のモスクワ大会など、政治がオリンピックを利用してきたことも事実である。さらに、1988年のソウル大会以来、ドーピング問題は2016年のリオ大会まで規模は拡大し、方法は複雑になっている。オリンピックが世界で最も魅力的で巨大なイベントになる一方で、ドーピング、商業主義、政治との関係などの観点からオリンピック批判が存在する。オリンピックの現実にはクーベルタンの理念に反して、ある種の危機に直面している。

オリンピックの有名なスローガン「より速く、より高く、より強く」は、オリンピズムに加えてオリンピックの理念としてオリンピック大会に影響を与えてきた。それは達成価値を表現する一方で、オリンピックの批判的現実に関係づけられて考えられてきた。ハンス・レンクはそのオリンピックスローガンに「より人間的に」を加えるべきであると提案した。この「より人間的に」は、オリ

ンピック現象における人間存在の価値を保つことが意図されている。しかし彼は、「より人間的に」の意味を様々な文脈で記述しているにも関わらず、概念的に明らかにしていない。

本研究の目的は、H.レンクによって提起された新たなオリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く、より人間的に、より美しく」の「より人間的に」の概念を明らかにすることと、それを一つの原理にして現代オリンピック存続のための思想を提示することである。レンクは現代オリンピックの現実を批判する様々な文脈で、従来のモットーに「より人間的に」を付け加えている。彼のオリンピック論の中で最初にこの言葉が出てくるのは、1979年の『競技の社会哲学』であり、次いで2006年の東京講演「オリンピック競技者の人間学—オリンピック大会と競技者のための現代哲学に向けて—」である。これ以降のオリンピック論で「より人間的に」は出てくるものの、その意味を彼自身は明確にしていない。この発想の元になる論考が、1977年のHumanisierung Leistungssportである。本稿ではこの論文まで考察の対象を遡り、1985年における「スポーツの人間の限界」に関する議論、それを受けた1987年の「生物学的基盤」の視点からの競技スポーツとオリンピックに関する議論を対象として考察を進める。

## 2. 「より人間的に」表現の文脈

まず、1979年の『競技の社会哲学』では、次のように言われている。

彼に（クーベルタン）にとってスポーツは様々な機能に混じって準備された生活の闘争という点で、若者の攻撃性のはけ口と考えられている。しかし彼が目指したのは、ダーウィンの「生存競争」「適者生存」を「より人間的により正確に（more human and more precise）」「成功をめぐる競争」の意味に変えることであった。この意味で、スポーツの競争は実際の生存競争とは異なる<sup>1)</sup>。

この言説は「エリート主義、記録そして競争」とのタイトルのもとで述べられ、クーベルタンがスポーツを教育手段と考えていた点から、レンク自身がクーベルタンの思想を評価している文脈で「より人間的に」が使われている。

次に2006年の講演では次のように述べられている。

最も有名なオリンピックのモットー「citius, altius, fortius」（オリンピック憲章第10条）は、「より美しく」（pulchrius）という言葉と「より人間的に」（humanus）という言葉によって補完され、オリンピック運動（ムーブメント）の美的で人道主義的なねらいを成し遂げなければならないのです<sup>2)</sup>。

この2006年の記述の中で、レンクは4つの「オリンピック運動における伝統的な人間像」<sup>3)</sup>を提起している。それは、「自己を完成させようと努力する人間」、「最善を尽くして達成する人間」、「キリスト教の個人主義的人間像」、「実用的で技術的な人間像」<sup>4)</sup>である。これらは西洋世界を形作ってきた伝統的な西洋の人間像であるが、特に「実用的で技術的な人間像」の危険性を指摘する。レンクはそれを「現代でも人類と自然にとっ

ては危険な存在とみなすべき」<sup>5)</sup>であると考えている。これらに加えて、さらに異なるタイプの人間像を5つめの人間像として提起する。それが、「自然のリズムやシステム、生態系のシステムなどに適応しながら自然の一部として生きる人間像」<sup>6)</sup>である。新しいオリンピック哲学を考える必要があること、それは、5つめの人間像を加えることで主張されている。先の4つの人間像は極めて西洋的（ヨーロッパ的）人間像である。それは個人を重視する点と技術的人間像から読み取れる。

一方で、「自然の一部として生きる人間」は、西洋的であるよりも東洋的の人間像であると言える。それは自然の意味から明らかである。鈴木大拙は次のように述べる。「西洋のネイチュアには『自然』の義は全くないといってよい。ネイチュアは自己に対する客観的存在で、いつも相対性の世界である。『自然』には相対性はない。また客観的でない。むしろ主体的で絶対性をもっている」<sup>7)</sup>。「西洋のネイチュアは二元的で『人』と対峙する、相剋する、どちらかが勝たなくてはならぬ。東洋の『自然』は『人』をいれておる。離れるのは『人』の方からである。『自然』にそむくから、自ら倒れて行く」<sup>8)</sup>。西洋的自然は人間にとって対象化されるべき存在であり、東洋的自然は人を含むものである。人間の側から見れば自然が主体となる。人間が自然を規定するのではない。人間が自然に背くとき、人間は自ら倒れるという意味で、自然が人間を規定している。このような東洋的自然観に近い自然と人間の関係性が、レンクの5番目の人間像にも反映されているといえる。

これまでのところで、「より人間的に」のルーツはクーベルタンに求められる点が突き止められ、従来のモットーに加えて新たなモットーを主張した2006年における「より人間的に」は自然の観点が含まれていることが確認できた。

### 3. 各論文における「人間化(Humanisierung)」の議論

#### 3.1 1977年論文<sup>9)</sup>における「人間化(Humanisierung)」

Humanisierung im Hochleistungssport: Pragmatisches und Programmatische zur Ex-Aktiven und Ex-Trainers.Handlungsmuster Leistungssport.

この論文で「人間化」が意味されている点は二つである。まず問題にされている第一点は、特にトップレベルの競技者の職業準備の問題、今日の言葉でいえばセカンドキャリアの問題である。競技者としてのキャリアを終えた後、特にスポーツに関係した職業に就けるための教育機会の提供が最も重要であるとされている。このことがなぜ人間化なのか？

この論文の前半部分で語られていることは、競技スポーツに対する批判へのレンクによる反批判であった。レンクが金メダルを獲得したローマオリンピックを揶揄する記事が、Rezzoriによって当時のシュピーゲル誌に掲載された。ローマオリンピックはシュピーゲル誌上で、「19世紀の遺物 (eine abgelebte Sache des 19. Jahrhunderts)」<sup>10)</sup>とその前近代性を批判された一方で、Anderschによって「ばかげた記録追求と超商業主義の組織 (idiotischen Rekordbetrieb und die Organisation eines Supergeschäfts)」であるとも批判されたのだった<sup>11)</sup>。またレンクは1977年論文の中で、ミュンヘン大会1年前の1971年にはProkopが競技スポーツを体制維持のための政治的に利用されるものと批判した点に言及している<sup>12)</sup>。高いレベルにある競技者には自由など存在せず、その存在は政治的に利用されているとの批判は、1960年代の西ドイツで言われていたことだった。オリンピック、競技スポーツ、トップレベルの競技者に対する揶揄を含んだ批判は、レンクにとって許しがたい見解である。それらの競技スポーツや競技者への批判に対し、レンクは次のような反論を行

う。「時代遅れのスポーツ批判によって、スポーツ科学の教育研究は過小評価されている」<sup>13)</sup>。物理学や歴史学に比べて、スポーツ科学研究はレベルの低い学問分野とみなされているとレンクは捉えている。スポーツ科学の研究対象はトップレベルのスポーツであることが多い。また、競技経験を持つ人も多い。レンクは次のように言う。「オリンピック競技者の三分の二ないし四分の三が水準以上の教育レベルと高い達成動機づけを有していることから、スポーツと社会は方向を変えなければならない」<sup>14)</sup>。スポーツと社会はどのような方向に変わらなければならないのか？ここでの文脈で求められていることは、競技者のセカンドキャリアへの方向である。競技者の教育レベルの高さと達成動機づけを根拠として、トップレベルの競技者の職業準備教育の重要性をこの論文で指摘している。

次いで第二点の人間化は、第一点を引き継ぐ形で、「自然」への言及と人間の達成行為の価値を再認識することに向けられている。自然に対して、レンクは次のように述べる。「スポーツはテクノロジーではなく、自然の手段を利用し、行動を通じた知的規律化と変化をもたらすことで「自然の」リソースを存分に利用することである」<sup>15)</sup>。スポーツは自然性の上に人間の知的行動を上書きしつつ作られる。この過程がレンクの考えるスポーツの達成行為である。しかし、1970年代のスポーツは社会批判者達によって達成は強制された行為として解釈され批判された。レンクはこれに対する反批判としての達成擁護を「人間化」としていた。レンクの基本的人間観である「成し遂げる存在」としてのオリンピック競技者が当時の役員から軽んじられ、ジャーナリズムや新左翼の思想家から「達成へと強制された人間」と批判されることに対して、レンクは自ら成し遂げ、独自で創造的な行為主体としてのオリンピック競技者像を提案している。この人間像が、この時点においてのレンクによるオリンピック競技者の人間像である。レンクは当時のドイツにおけるスポーツ連盟役員や

ジャーナリストの誤解を解き、「成し遂げる存在」としての競技者についての理解を訴えることを動機として「人間化」という表現をここに登場させたと思われる。

したがって、1977年論文における「人間化」は競技者の人間像をめぐる問題であって、具体的な政策に焦点をあてたものではなかった。そのことは、トップレベル競技者の職業準備の問題でも同様といえる。競技者のセカンドキャリアの問題でいえば、キャリア支援のシステムを構想するのではなく、職業準備ないしキャリア形成に耐えるだけの素養を競技者は有しているという、競技者という存在の人間的資質を確認する考察が1977年論文では展開されていた。

### 3.2 1985年における能力と記録の限界論

1985年の“Die achte Kunst”（邦訳：スポーツと教養の臨界）<sup>16)</sup>において、「能力の限界」に関する議論（S.63-65）と「より速く、より高く、より強く—記録は限界がないのか」の議論（S.65-68）にみられる。

#### ① 能力の限界

スポーツの達成能力の限界をどうとらえるか。陸上競技や水泳の記録は現在も更新されている。およそ100年の間に更新され続けた記録は、どこまで更新可能なのか。いずれ記録更新が止む時がくるのか。この問題に対して、レンクは「限度（Schranken）と限界（Grenzen）の違い」を議論する。例えば、「人間は100メートルを5.7秒で走ることはできないだろう。そして普通の投げ方で槍を200メートルも投げられる選手もいないだろう」<sup>17)</sup>という。ここでレンクが言っていることは、人間には生物学的に決して超えられない達成できない数値としての「限度」という境界がある。これは一つの間人観であり、パスカルの「中間者」が連想される。人間は存在そのものが有限である<sup>18)</sup>。人間は中間者である限りにおいて偉大さと悲惨さという二面性をもって生きざるを得ない。特に存在の悲惨さとは、何よりも自然の前

に無力であることが第一の意味になる。競技者の場合、限度としての絶対的な「能力の限界」は際限なき記録更新の熱にブレーキをかける役割をする。記録への挑戦が競技者にとって魅力であるのは、人間としての限界（Grenzen）に挑戦するときである。限度（Schranken）への挑戦は（たとえば100メートルを5秒で走る場合）人間としての可能性どころか原理的に無意味な行為に陥る<sup>19)</sup>。競技者が人間であることは、限界内で戦う限りにおいてである。

#### ② 記録は限界がないのか

能力の限界をめぐる議論は、次いで記録追求の過激化を批判する文脈に受け継がれる。レンクはかつてドイツオリンピック委員を務めたピリー・ダウメの当該モットーへの批判を取りあげる。レンクによれば、ダウメは次のように考えていたという。

「その文が全く制限を受けることなしに絶対化されるならば、人を非人道へと導き、誘惑する危険に陥る」<sup>20)</sup>。この言葉によれば、ダウメは明らかにオリンピックモットーが危険なものであると考えていた。ダウメの認識に対して、レンクは危険性という理由からモットーの危険性を認めている。その一方でモットーを提起したクーベルタンを擁護する。クーベルタンは「より速く、より高く、より強く」を無制限に考えていたのではなく、これを制限すべき倫理的側面も考えていたとする。クーベルタンへの評価はここでの本筋から外れるのでこれ以上立ち入ることはしない。では、その倫理的側面とは何か。

レンクはモットーが非人道的にならないための倫理的観点を次のように述べる。「あらゆる報酬をめぐる記録、競争、勝利などは意義深いものであり得ず、善、すなわち落ち着いた状態で完全に成し遂げることと誠実に導かれた競争を純粋な手段にすることのみが、意義深いものとなり得る」<sup>21)</sup>。オリンピックのモットーが非人間的にならないために、レンクは成し遂げることと競争の倫理性を主張する。もし、オリンピック大会ないし競技に

において倫理性が失われるとすると、その場面は、達成の際限なき追求、競争の激化に現れる。記録の激化と競争の激化は対をなして進行し、オリンピックは競技者にとって危険な遊戯へ変化する可能性がある。レンクはその例を次のように述べている。「オリンピックのスキー競技の滑降コースは、常に危険で急なものでなければならぬのか。死者が出て初めて、スキーのコースを緩和すべきなのだろうか」<sup>22)</sup>。「落ち着いた状態で完全に成し遂げること」<sup>23)</sup>は死に直面しつつ競争することからは生まれない。死と引き換えに際限なく危険性への傾斜を強めることの非人間性がここで指摘されている。

### 3.3 1987年 Leistung im Brennpunkt<sup>24)</sup> における「生物学的基礎と人間性」S.221-231

1985年の能力と記録の限界を巡る議論は、1987年の本書の中で「生物学的基礎と人間性 (Biologische Basis und Humanität)」としてまとめられている。内容は1985年のDie achte Kunstの記述とほぼ変えられることなく、「生物学的基礎と人間性」という見出しのもとで再度記述されている。ここではスポーツの文化性に関する一般的な記述(オリンピックの人間性に限らず)も見られるが、オリンピックに言及されている箇所でも重要と思われるのはサブタイトルの次の部分である。「オリンピックスポーツに絶対的な限界はあるのか? (Gibt es absolute Grenzen im olympischen Sport?)」。ここでの議論は、人間としての絶対的な限界である限度を守りつつ、人間的であることを確保するための「限界」に関して倫理を求める点である。生物学上の絶対的な限界である限度に手を加えることはできないが、人間に手の届く倫理的な限界は、人間の手で規制されるべきであると解釈される。たとえば、前に述べた危険なオリンピック種目の規制は、倫理的限界として人間の力で規制されるべきということになる。

### 3.4 2010年の人間化 Sport von Kopf bis Fuss (ball)<sup>25)</sup>

オリンピックを目指し出場しメダルを獲得する競技者は、日常を生きる人間存在とは異なる。オリンピックの競技者は、レンクが様々な場面で指摘する「並外れた達成」を必要とし実践する。それなくしては、オリンピックの出場さえも実現できない。オリンピックの競技者が、日常の人間存在とは異なるのであれば、それはどのような存在なのか。オリンピックの教育的価値から考えると、人間はどのようなオリンピックの競技者を目指せばよいのだろうか。レンクは次のようにいう。「オリンピック人間像の基本的価値もオリンピック憲章の中で詳しく定義されていないし説明もされていない」<sup>26)</sup>。ここでレンクが指摘しているのは、オリンピックに関わる人間としての競技者の人間像が未だIOCによっても明確化されていない点である。IOCがオリンピックの人間像や人間としての価値について明らかにできていない以上、オリンピックに求められる「人間性」あるいは「人間らしさ」をIOCの公的言説から解釈することは不可能である。それはせいぜい場当たりの都合よく求められる人間像や人間的価値をアピールするにとどまるであろう。たとえばドーピングが話題になればフェアネスや健康が、金銭問題がメディアに指摘されれば純粹さが、国際紛争が話題になれば友情や調和がといったように、レンクが考えるオリンピックの人間像は、並外れた達成をなす人間である。かくして、ここから導かれる人間性は達成する存在を意味するものとなる。オリンピックの人間性は、日常生活における人間のイメージではない。そこにあるのは「やさしさ」や「思いやり」といったイメージで語られる人間性とは別の形である。

ドーピング問題はレンクのオリンピック哲学において、人間化の問題と関わる。アンチドーピングをIOCに意識させた歴史的として、1960年ローマ大会での選手の死亡事件がある。自転車競技でデンマークのイエンセンが競技中に死亡し、後に

アンフェタミンの大量摂取によるものと判明した。ドーピングによる初めての死亡事故をきっかけに、IOCはドーピング禁止を明確にするようになる。ドーピングの禁止理由はいくつか挙げられるが、アンチドーピングをIOCに意識させたのはドーピングによる選手の死という出来事であった。ドーピングの非人間性は死に至る可能性にある。オリンピックの人間化は、レンクの中でドーピング問題と結びつく。彼は次のようにいう。「トップレベルのスポーツにおける人間化のために、なかでもオリンピックにおいては初歩的な措置は実行されている（アンチ・ドーピングプログラムやコントロール）。しかし、それらは明らかに十分なものではない」<sup>27)</sup>。

生命の危機を抑えることの中にトップレベルスポーツにおける人間化の意味がある。ここから導かれる「より人間的」なオリンピックは、競技者の健康や生命を脅かさないスポーツの祭典を意味している。ドーピングという違反行為によって競技者の健康や生命が脅かされることのない競技にしていくことが「より人間的」なオリンピック像となる。

#### 4. 自然性と人間的であること

これまでの考察から、「人間的」の意味は、人間の自然性とスポーツの倫理に関わることが明らかになった。それを具体的なオリンピックの事象と関連づけるならば、ドーピングに焦点が合わされる。1979年に次のように言われている。

もしある競技者が、そして不幸な場合は多くの競技者がアナボリックステロイドをはじめとする薬物摂取を行うとしたら、「より速く、より高く、より強く」を信奉する態度から危険が生まれるであろう。まだ確認されていない長期にわたるドーピングが規制されないのであれば、非人間的な結果を見ることになるだろう。（大会の3週間前に薬物の摂取をやめれば、オリンピック理念を代表

する達成とみなされてしまう可能性さえある。IOCの前副会長ダウメですら、「より速く、より高く、より強く」はまったく危険なスローガンであるとの認識を抱いていた<sup>28)</sup>。

オリンピックにおける非人間的な出来事の代表例として、ドーピングに言及されている。自然性の議論は、オリンピックで具体的に引き起こされる問題としてドーピングに焦点があてられる。

#### 4.1 生物学的自然性とドーピング

現代オリンピックの問題でドーピングに焦点が当てられるときに、その根拠となるのが生物学的自然性である。周知のように、これまでドーピングが禁止されるべき理由として、医学的健康の観点から挙げられてきている。ドーピング、特に薬物を用いたドーピングは選手の身体を健康を脅かすというものである。レンクの生物学的観点は、選手の健康問題に直接結びつくだけではない。先の1979年の引用でいうならば、ステロイドによる選手の生命・健康への危険を及ぼすという生物学的観点と、さらに「より速く、より高く、より強く」の危険性が言われている。さらに1980年代の記述では、ドーピングによって進めた結果、人間の生物学的限界を超えてしまう倫理的危険についても言及されている。そこには確かに健康上の危険も含まれる。けれども、より強調されるべきは生物学的限界を超えてしまうことの「非人間性」である。人間には生物学的に超えられない限界がある。中間者としての人間は限界づけられた状況の中でベストを尽くさねばならない。

#### 4.2 第二の自然と達成概念

人間の自然性がドーピング問題に限定されるのであればレンクの中心概念である達成との結びつきは弱いままである。なぜなら、達成の抑制がドーピング問題の解決法として有効と考えられるからである。しかし、達成概念と結びつく自然がある。

レンクは生物学的自然に加えて、人間存在独特

の自然性として「第二の自然」に言及する。1985年の“Die achte Kunst”（邦訳：スポーツと教養の臨界）および1987年の“Leistung im Brennpunkt”でそれぞれ次のように言われている。「アーノルド・ゲーレンが主張したように、人間における自然性とは文化のことである。まさにそれは第二の自然と呼ばれるものである」<sup>29)</sup>。人間は生物学的に限界づけられたという意味でのいわば第一の自然と共に、文化を基礎づける第二の自然がある。レンクはこれを積極的に評価している。「トレーニングそれ自体あるいはトレーニング方法の新たな開発と運動様式（たとえばフォスベリーフロップのような）は、薬物操作の及ばないレベルで、しかもスポーツの発展と創造の理念に一致した合法かつ自然な行為の改良ないし運動の技術革新として現れてくる」<sup>30)</sup>。第二の自然とは人間の能力の改良改善である。スポーツのフォスベリーの例でいえば、それは独自の創造的な達成行為として現れる。レンクの自然概念は、少なくともそれをスポーツに適応する限りにおいては、独自の創造的な達成行為は第二の自然とみなされる。人間の達成行為は第二の自然に位置づけられることで、人間の自然の内にあることになり、人間的であることのうちに場所を確保されることになる。

第二の自然は、競争相手に勝つ手段として使われる場合、それは記録の病理と競争の激化を助長する。第二の自然が記録更新や勝利の手段となる時、達成行為はスポーツの道具となる。この種の達成行為は、人間から離れる。第二の自然としての達成行為が人間的であることの条件は、それを手段として使うのではなく、目的として人間の中に位置づけることである。それは自然を主体とみなす態度である。先に2のところでも触れたように、自然を客観的存在ではなく主体的存在とみなすことは、東洋の伝統である。

前に述べたように、禅哲学者の鈴木大拙は西洋的自然の概念は自己に対する客観的存在であると指摘した。それは時に克服の対象になる。この場

合、自然は人間のライバルとなる可能性がある。一方で鈴木は、東洋の自然は主体的であると述べる。人間が自然を規定するのではなく、自然が人間を規定する。東洋の自然観において自然と人間は一体である。このような東洋的自然観に従えば、第二の自然は道具的存在ではなく目的的存在とみなされる。このことは、ベストを尽くすことの対象が競争相手から自己へ転換することを意味する。第二の自然を競争相手に勝つ手段として使うのではなく自己目的に位置付けることは、レンクの達成概念の範囲にある。

## 5. 結論

レンクがオリンピックのモットーに加えた「より人間的に」の意味は、達成を抑制するものではない。レンクの中で達成は肯定されており、それ自体は人間的である。その意味することは「より人間的に成し遂げること」である。これまでの考察の結果、レンクがオリンピックモットー「より速く、より高く、より強く、より人間的に」で表現したオリンピック哲学、とりわけ「より人間的に」の意味は次のようになる。人間は常に限界づけられてあり万能、永遠の存在ではないこと。「より人間的に」とは、その限界づけられている状況の中で成し遂げることを強調した言葉である。

よって、レンクのスポーツ哲学の側からいえば、「より人間的に」のもとで一方向的に達成を否定することは誤りである。オリンピックの人間像は達成する人間であり、この人間像が競技者像の原型であることは文献を読む限り一貫して主張されている。この意味での人間化は、かつての社会批判者による「便利な愚者」として生きることとも異なるし、近年のテレビと大衆が競技者に求める「親しみやすさ」とも異なる。この「より人間的に」という言語表現は、その意味内容をあいまいにしたまま使用するならば、時としてスポーツ独特の厳しさを打ち消す印象を喚起させるしかたで人々に使われる場合があるだろう。しかし本稿は、レ



ンクが意図した意味内容が、そのような印象に必ずしも結びつかないことを明らかにした。「より人間的に」の実現は、オリンピズムと同様に「終わることのない物語」<sup>31)</sup>なのである。

レンクの新たなオリンピックのモットーは、競技者の生命、達成の肯定を通じて目標に向かって人格を投入する競技者擁護の思想によって貫かれているといえる。1979年論文における競技者のキャリア、人生への配慮からもそれは言える。そして、もう一つ、オリンピックの持続の方向を示すならば、競技者の達成行為を生物学的限界のもとで倫理的に追求する方向にそれはあるといえるだろう。

#### 注および文献

- 1) Lenk, H. (1979) *Social Philosophy of Athletics*. Stipes, p.142.
- 2) Lenk, H. 畑孝幸・関根正美訳 (2006) オリンピック競技者の人間学—オリンピック大会と競技者のための現代哲学に向けて—。体育・スポーツ哲学研究, 28-2, pp.119-134.
- 3) 同上論文, pp.119-134.
- 4) 同上論文, pp.119-134.
- 5) 同上論文, pp.119-134.
- 6) 同上論文, pp.119-134.
- 7) 鈴木大拙 (1997) 東洋的な見方. 岩波文庫, p.220.
- 8) 同上書, p.220.
- 9) Lenk, H. (1977) Humanisierung im Hochleistungssport: Pragmatisches und Programmatheoretische zur Ex-Aktiven und Ex-Trainers. In: Lenk, H. (Hg. 1977) *Handlungsmuster Leistungssport*. Karl Hofmann, S.94-111.
- 10) v. Rezzori, G. (1960) Ein Maghrebinier in Rom. *Der Spiegel*. Nr. 37/1960, S.64-65.
- 11) Andersch, A. (1960) Der unliterarische Olympic. *Frankfurter Allgemeine Zeitung*. 1.9. 1960.

- 12) Lenk, H. (1977) *op.cit.* S.94-111.
- 13) *Ibid.*
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*
- 16) Lenk, H. (1985) *Die achte Kunst. Leistungssport—Breitensport*. Interfrom. 畑孝幸・関根正美訳 (2017) スポーツと教養の臨界. 不昧堂出版.
- 17) *Ibid.*, S.51.
- 18) たとえば次のパスカルの言葉が限界をもつ存在という人間観を示している。「どうして私の知識、私の背丈は限られているのか。どうして私の寿命は千年ではなくて百年なのか。自然にはいかなる理由があつて、私の寿命をそう定め、無限の中で、他でもなくこの居場所を選んだのか」。  
パスカル, 塩川徹也訳 (2015) パンセ. 岩波文庫 (上), 194. p.236.  
また、有名なフレーズは次のように言われている。「人間は一本の葦にすぎない。自然のうちで最も弱いもの、しかしそれは考える葦だ」。  
パスカル, 塩川徹也訳 (2015) 同上書, 200. p.257.
- 19) ただし、ドーピングによって突破を試みることは可能であろう。たとえば斬新なドーピングの方法で100mを5秒台で走ることも可能かもしれない。しかしこの試み自体が「限度」を超えることを目指す行為であり、本稿の立場でいえば人間性に反する行為となる。この意味で、ドーピングはいくつかの禁止理由とは別の理由で「反人間的」行為となるだろう。
- 20) Lenk, H. (1985) *op.cit.*, S.53.
- 21) *Ibid.*, S.54.
- 22) *Ibid.*, S.54.
- 23) *Ibid.*, S.54.
- 24) Lenk, H. (1987) *Leistung im Brennpunkt*. DSB,
- 25) Lenk, H. (2010) *Sport von Kopf bis Fuss (ball)*. Lit.

<sup>26)</sup> *Ibid.*, S.110-111.

<sup>27)</sup> *Ibid.*, S.116.

<sup>28)</sup> Lenk, H. (1979) *Social Philosophy of Athletics*. Stipes, p.143.

<sup>29)</sup> Lenk, H. (1985) *op.cit.*, S.58.

<sup>30)</sup> Lenk, H. (1987) *op.cit.*, S.230.

<sup>31)</sup> cf. Lamartine DaCosta, (2006) *A Never-Ending Story: The Philosophical Controversy*

Over Olympism. *Journal of the Philosophy of Sport*, pp. 157-173.

附記：本稿は研究プロジェクト2に関連する内容で、研究遂行にあたってはJSPS科研費（課題番号17K01692/研究代表者：関根正美）の助成を受けている。

（受理日：2019年4月18日）